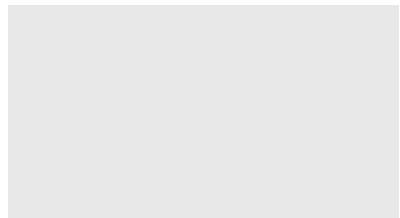


書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します



# 模倣と創造

哲学と文学のあいだで

明治大学人文科学研究所叢書  
井戸田総一郎  
大石直記  
合田正人  
**SAMPLE**  
**Shishi-Shinsui.com**

書肆心水

## はじめに

「言語の不安」——「言語による不安」とも「言語」という不安とも言い換えることができるだろうが——、これが本書の全編に立ち込めている情動ではないだろうか。とはいへ、「不安」は必ずしも否定的なだけの情動ではない。「不安」とは漠たる、無定形な動搖 (*in-quietude, unrest*) であつて、その蠢きから様々な響きや形象や情動が生み出される星雲のこときものもある。もちろん、それが確たる基盤の不在にほかならないことに変わりはない。

私たちが、「言語」とみなしているのはこのような蠢きのほんの一端でしかない。自然ないし宇宙はみずから自分自身を形成していく。この形成はある者にとっては途方もない破壊やカタストロフとして現れるけれども、自然ないし宇宙はつねに至るところで生成変化を続けており、この生成変化は何らかの「微し」(シーニュ) を伴つているのだが、そこでは、「自然化する自然」と「自然化される自然」とが不可分であるように、「微し」を発するものと「微し」に応えるものは不可分である。かつてアランが、身体をその眞の故郷たる宇宙に返すことと言つたように、どれほど局部的システムの匂いのなかに閉じ込められているかに見えるとしても、これまで生成変化の途上たる「個体」<sup>1</sup>様態 (mode) は、自然ないし宇宙の全体どこかで結びついている。極小の小波が海全体と、宇宙全体と結びついているようだ。この感覚、それがいかなるものであれ言葉を発するときに、言葉を読むときに、言葉を聞くときに感じるのは微妙なぶれの感覺、それは世界の諸言語、動物の、植物の、無機物の、いまだ人間が知ることのない物質の振動と咳きとの微かな運動を告げるもののだが、それこそが「言語の不安」であり、この「万物照応」(コレスポンダンス) こそ、クセナキスのような作曲家が作り出す宇宙のざわめきであり、ウェーダーのような気象学者が読み取る大地

の移動であり、数々の勝れた詩人たちが「詩法」と呼んだものの奥義であり、中井久夫のような優れた翻訳家＝精神科医が感得した「言語のミーティングポイント」なのである。いや、いまだそのメカニズムは解明されていないとはいえ、私たちは「言語」を獲得するに際して、失語に陥るに際して、「言語」を忘却するに際して、この遭遇を経験しているのかもしれない。そしてそこに、「ミメーション」の、「模倣と創造」を思考する鍵が隠されているように思えるのだ。

ミーティングポイント、接合点はまた分界点、分裂点でもある。今、「ミメーション」「ミミック」「模倣」「真似」と発声してみて欲しい。上唇と下唇が出会い、離れるときに「ム」という音が発せられる。この動きは呼吸にも発音にも接触にも性愛にも見られるもので、免疫学の大家、多田富雄が指摘したように、人間がそもそも「管」であるなら、「管」への流入とそこからの流出をそこに看取することができる。そして、これほど日常的な出来事のなかで、まさにこの数センチの裂け目を通じて、無限の自然ないし宇宙が何らかの仕方で自己表出しているのではないだろうか。「気」の概念がそれに相当するとも言えるかもしれないが、このような自然ないし宇宙の自己表出である限りで、すべての個体はその程度は異なるとしても互いに類似しているのだ。のみならず、どの個体もそれ自身に類似し、それ自身のミメーションなのである。

言い換えるなら、これはいわゆる「同一性」もいわゆる「他者性」も実は存在しないということでもある。たしかに、言語はどうしようもなく自己主張と他者との疎通の手段とみなされてしまう。にもかかわらず、言語を取り憑かれた者たちは異様な孤独、孤独とも言えないまさに「不安」を感じざるを得ないのだ。そして、この「不安」を濃密化すること、そこにしか「共同研究」と呼ばれるものの意義はないのかもしれない。すでに唇の隙間にについて語つたように、私たちの生存過程そのものが「自己」と「他者」という二元コード化の不斷の審問なのだから。

かつてヴァルター・ベンヤミンが「複製技術時代」と呼んだものが更に高次化を続けて、「複製」がもはや「原型」の「複製」ではなく、何の「複製」かも分からぬまま増殖を続けている。そこには、国境をも超えて「社会」「国家」の基礎と見えた「信頼」を根底から搖るがす動きがある。この脅威のなかで今も生まれつつある新たな接続の歎びお

よび危険がある。そして更に、無理矢理にでも虚構の「信頼」を捏造しようとする動きがある。それらの動きが複雑に衝突するなか、本書の執筆者三名はそれぞれの視点から、「模倣とは何か」「創造とは何か」という、あまりにもアクリュアルな、しかしあまりにも言い古された問題系をめぐって考察を続けてきた。孤独な軌道を描く迷い星が互いに接近してまた遠ざかっていったと言えばよいだろうか。どのような「共同研究」であつたかの詳細は、研究代表者である大石直記の「後記——本書成立の経緯」を読んでいただきたい。「共同研究」の機会を与えていただいたのみならず、本書の出版を助成していただいた明治大学人文科学研究所、そしてまた、本書の出版をご快諾いただいた本書を作り上げてくださった書肆心水の清藤洋氏に心からの御礼を申し上げたい。

「まさに汝が生の流れをまたいで進むために必要な橋をかけることのできる者は誰もいない、汝以外には誰ひとりとしていないのだ。（…）世には汝以外に誰も歩みえない唯一の道がある。この道はどこへ行くのか？と問う勿れ、ひたすらに進め。「人は自分の道がどこへ導いて行くかを知らないときほど向上しているときはない」という格言を語つたのは誰であったか？」（ニーチェ『反時代的考察』ちくま学芸文庫、二三八—二三九頁）

二〇一七年一月二十四日

著者を代表して 合田 正人

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

目次

はじめに 合田正人 3

第一章 模倣・創造・書記行為——ニートの文体と孤独

井戸田 総一郎

序 13  
I 模倣とジエラシー 16

II 繙承と断絶 20

III パロディア——模倣と創造 25

1 少年期の無題八行詩 (29) 2 「さすらい人の歌」と無題四行詩 (37)  
に寄す』を読む (48) 3 『ゲーテ

IV 文体と孤独 62

1 散文と詩文 (66) 2 文体と孤独 (68)  
3 読書行為 (84) 4 記憶、消化不良 (89)  
5 読書行為 (84) 6 文体と孤独 (68)  
7 記憶、消化不良 (89)

註 97

第二章 擬きとかぎろいの星座

タルド、カイヨワからデリダへ

合田正人

### 第三章

#### I 森鷗外と近代的表現へのアクチュアルな「問い」

——伝承と自由と、あるいは、ミメーションとポイエーションと

大石直記

223

- I 1 「身を投げる女」の表象——世紀転換期における再生する古伝承
- 2 はじめに（224） 2 自己否定性（225） 3 「生田川」（230） 4 「草枕」読解（235） 5
- 応答と対話と（245）

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

I はじめに 106	タルドと模倣 108
II カイヨワと擬態 151	タルド復興（108） 2 メース・ド・ビランとタルド（111） 3 クールノーとタルド タルヌヴィエとタルド（122） 5 模倣——差異と反復（128） 6 模倣の迷宮 （132） 7 人種・民族・国民（137） 8 アラン間奏（138） 9 デュルケム—タルド論争（142）
III 現象学とミメーション 182	1 アルペイオス川（151） 2 カマギリ（155） 3 亡命者たち（158） 4 擬態と伝説的精神 衰弱（161） 5 鏡と擬態（164） 6 ベンヤミンにおける模倣能力（167） 7 神話と啓蒙 （170） 8 反ユダヤ主義とは？——ホルクハイマー／アドルノとサルトル（175）
註 222	5 無言の声（204） 6 新たな石版は……（214） 7 Incipit（220） 8 現実とその影（193） 9 点描の未来（198）

## II

文学テクストにおける「夢」の威力、ないしは権能 250

——生成する「山椒大夫」、〈写実〉と〈比喩〉と

- 1 鷗外における『伝説』のプロブレマティク (250) 2 「夢」の威力——『夢』と現実の間、あるいは『闕域』ということ (256) 3 夢の言説／沈黙の言語 (262) 4 伝承と創造と (267)

## III

〈非合理なるもの〉の根源・『かのやうに』と『天保物語』と——行為論的地平へ

## IV

晩期鷗外文学における伝承性への視角

——文体、或いは、〈模倣〉と〈創造〉の交差する場へ 288

- 1 問い (289) 2 反・自己言及性 (289) 3 「他なるもの」へ (291) 4 思索の方位 (291)  
 5 合理と非合理と (296) 6 美学的志向 (297) 7 晩期へ向けて (299) 8 『伝説』問題 (293)  
 (300) 9 〈伝承〉の再創造 (302) (30)

## V

鷗外文学のアクチュアリティ 304

——総括的考察、〈模倣〉と〈創造〉、その抗争様態をめぐって

- 1 動態——連續と非連續 (304) 2 「生田川」、再び——その美的達成 (306) 3 〈受動性の原理〉 (310) 4 〈行為〉論的転回 (314) 5 鷗外とミメーシス問題 (303)  
 現の更新へ (317) 小説表

## VI

補論・森鷗外と〈子規の衣鉢〉 318

——近代日本の亡失された水脈、あるいは、ホーリズムの方へ

註  
334

後記——本書成立の経緯 大石直記

337

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

模倣と創造

哲学と文学のあいだで

# SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

## 第一章

模倣・創造・書記行為

ニチエの文体と孤独

井戸田総一郎

# SAMPLE Shoshi-Sinsui.com

## 凡例

- 一、作品・著書名の表示はドイツ語の場合はドイツ語引用符、英語の場合は英語引用符、ギリシャ語・ラテン語の場合は（）を用いた。
- 一、説明における原文からの部分引用は、詩行一行や文単位あるいはそれに準ずるまゝまりのある表現の場合はドイツ語引用符を用いた。
- 一、楊格など、説明における概念を原語で示す場合は（）を用いた。

## 序

ドイツ・ナウムブルクのニーチェ文献研究センターにおいて、二〇一五年十月十五日から十八日まで『ニーチェと詩』(Nietzsche und die Lyrik)と題した国際会議が開催された。ニーチェ研究の国際的な広がりを反映して、参加国はドイツ以外にアメリカ、フランス、イタリアなど十か国に及び、七つの基調講演の他に三十八の研究発表が行われ、人文系の国際会議としては大規模なものであった。

一九九〇年に設立されたニーチェ協会 (Nietzsche-Gesellschaft) は、ニーチェの誕生日の十月あるいは没月の八月に年次学術会議を開催し、多くの成果を挙げてきている。哲学者ニーチェを巡りこれまでにさまざまなテーマが設定されてきたが、「ニーチェと詩」を本格的に取り上げる企画はドイツにおいて今回が最初であり、内外の関心を多く集めたようである。地元紙も、「ニーチェ文献研究センターの用意している椅子が足りない程の参加者の数<sup>(1)</sup>」について報じ、このテーマにたいする反響の大きさを伝えている。今回の企画立案は、コペンハーゲン大学教授クリスティアン・ベネとシュトゥットガルト大学教授クラウス・ツィッテルの両名によつてなされた。開会の挨拶のなかで、「ニーチェの思索と書記行為にとつて詩文は極めて重要な形式であった」とベネは述べ、さらにツィッテルは「ニーチェの哲学記述の一翼を担うものとしての詩文」を強調、「詩と哲学の分離の状況」を今後のニーチェ研究は克服していかねばならない、という強いメッセージを打ち出していた。<sup>(2)</sup>

ところで、ニーチェが文体について比較的まとまった形で言及しているのは、一八八一年の『ル・フォン・ザロメのためのタウテンブルク手記』の「文体の教義」という十項から成る教説であろう。「声」や「身振り」という感覚の重要性が強調され、「思想を感覚で感じている」とを文体で証明すべきである<sup>(3)</sup>とニーチェは言明している。これとほぼ同時期に刊行された『悦ばしき智慧』の第一書においても、ニーチェは一つのアフォリズムに「散文と詩文」という表題を付けて、文体に言及している。その冒頭部で、「散文の大家は詩人でもあったことは銘記されるべきだ」、あ

るいは「良き散文は詩文に敬意を払う時にのみ生まれるものであること、それは真に心に刻まれるべきだ！」という強い言葉を放っている。因みに、散文（Prosa）の語源に相当するラテン語 *prosus* は、「直線的に進展する動き」の意味を表している。例えば *prosa oratio* は「前方へ向けられた談話」を表し、公衆を前に自由な発話をを行うこと意味した。一方、詩文（Vers）の動詞形 *vertere* は「回転」「回帰」「反復」などを意味している。ニーチェのアフォリズムは、「直進」と「回転」という異なる原理を機動力にしている散文と詩文を対比的・対立的に描き、この二つの原理の「戦」こそが「良き散文」そのものであり、このような「戦の楽しみ」を理解しない「散文人間」を強い調子で批判している。

ここで少しこの「戦」の内実に入つてみよう。ニーチェはアフォリズム「散文と詩文」のなかで、詩文を「女神」に喻え、女神の「小さな纖細な耳」という言説によつて、詩文と響の連なりを暗示している。女神は「薄明」や「朧な色調」を好むと言われ、詩文が感覚の表層という不確定の領域に留まる文体であることも強調されている。これに対して、散文は具体（感覚）を捨象する力を持つ「抽象概念」*Abstraknum* によって代表され、曖昧を好む女神に悪戯したり、馬鹿にしたり、ついにはその「無味乾燥と冷血」は女神を「絶望」させる事にもなるのである。詩文と散文の「接近」あるいは「和解」は「瞬時」に見られることがあるが、ニーチェによれば、両者は常に「戦」のなかにあり、この「戦」そのものを楽しむことが文体にとって重要なことだ。

さて、「悦ばしき智慧」の第二版刊行の際に加えられた有名な序文の最後を思い起こしてみると、このような文体を求める書記行為そのものがニーチェの思索の中核を占めていたことが浮かび上がつて来る。

「真理のヴエールを剥がされ、それでも真理が真理であり続けられるとは、もはやわれらのなかで信ずる者なし。それを信ずるには、われらは生き過ぎたり。（…）「神様は何もかも見てゐるというのは本当なの？」と少女母に尋ねけり。「でも、それは失礼だと思つわ」。哲学者は少女のこの言葉を肝に銘じるべし！ 羞恥に対してもつと敬意が払われるべきではあるまいか。自然は、謎や不思議なる現象の背後に、羞恥つとも姿を隠している故。真理とは思うに素性を隠す訳ありの女性ではないか？ 真理の名は、ギリシャ語のバウボ（註 母胎のこと、女性の性器も表す）ではないか？

…… そうだ、あのギリシャ人たち！ 彼らは生きる術を良く心得たりき。生きるには、表面に勇もて留まること、襞や皮膚に立ち止まることを要す。仮象に敬意を払うこと、すなわちさまざまなる形式、音調、言葉、仮象のオリンポス全体を信ずることを要す。ギリシャ人たちは表面的にありし——深みから出でて！ われらはその地点に戻れるのではないか？ 現代思想の最高峰、最も危険な山頂をわれらは極め、その頂きより四辺を見回し、下方を見下ろしたるが故に。われらはまさにここにおいて——あのギリシャ人にはあらずや？ 形式、音調、言葉を讀える者！ まさに「芸術家ならずや？」<sup>(6)</sup>

この序文は、『悦ばしき智慧』の第五書を加える際に書かれたものである。『悦ばしき智慧』は、一八八二年八月に「序奏」と第四書までが刊行された。五年後の一八八七年にフリッチュ社から他の著作の新版を出版する一環として、『悦ばしき智慧』の第二版が新たな序文と第五書、さらに『プリンツ・フォーゲルフライの歌』と題した「終曲」を加えて刊行された。この第二版までの五年の間に、『ツアラトウストラかく語りき』（一八八三年～一八八五年）さらに『善惡の彼岸』（一八八六年）の出版が続いており、この序文は、これら的重要なテキストを内に孕む形で執筆されている。引用した箇所の「現代思想の最高峰」に始まる部分には、明らかに『ツアラトウストラかく語りき』が読み込まれている。いずれにしても、形式と音調を基本とし、反復などによつて感覚の「表面」に留まることのできる詩文と、具体を捨象する力を持ち直線的に進む散文との「戦」、その「戦」としての書記行為の確かな足跡を残すことが、この時期のニーチェにとつて大きなテーマであつたことは間違いない。これに関しては、最後にまた触ることにしよう。

本論では、文体にたいするニーチェの強い拘り、独自の文体センスが生まれてくるプロセスを、十歳代の頃のニーチェの文体訓練や詩作にまで遡りながら見て行きたいと思う。ニーチェの到達点とも言える『ツアラトウストラかく語りき』や『ディオニュソス頌歌』の文体を分析する上で、この作業は避けては通れないものだ。特に「文化の継承と断絶」というテーマは、ニーチェの文体形成における中核的な問題の一つであり、本論はこの視点からまずアプロー

チを始めて行きたい。

## I 模倣とジエラシー

クルティウスは『ヨーロッパ文学とラテン中世』の第一八章五節「創造と模倣」のなかで、ギリシャ語の書『ペリ・ヒュプースース』(Hερι πύψος)に触れている。この書の著者は高名なレトリック学者カシオス・ロンギノス(一二二年頃～一七一年頃)と思われていたが、一九世紀初めの文献学調査で否定され、その後著者は不明（その結果、著者はPseudo-Longinos「ロンギノスのようないう人」と表記されている）のままで、書かれた年代については紀元後一世紀の前半期と推定されている。一八世紀にニコラ・ボアローによってフランス語に翻訳されてから広く知られるようになり、アリストテレスとホラティウスの詩論と並ぶ美学上の最も重要な書とみなされている。「ヒュポス」*πύψος*は「高み」や「大きい」を意味する言葉であるが、それがフランス語の*sublime* やらにドイツ語の*erhaben* に訳され、「ペリ・ヒュプースース」は『崇高について』という標題で通用するようになった。クルティウスはこの翻訳を誤りであると断言し、E・E・サイクスが『ギリシャの詩論』(一九三一年)のなかで『大いなる文体』On great writingと訳している事例をあげている。つまり、『ペリ・ヒュプースース』はもともと文体論であり、「高き文学」「大いなる詩・散文」を話題にしている、とクルティウスは指摘している。

『ペリ・ヒュプースース』のなかで、「高き文学」へ向かう道筋のなかで最も重要なこととして挙げられているのは、「模倣とジエラシー」という概念である。これは、ギリシャ語でμημοσι τε και ζηλωσι (ミメオイス・テ・カイ・ゼーローオイス)と表記される。このギリシャ語からは、「心と身体」(ψυχή τε και σώματι プシュケー・テ・カイ・ゾーマティ)という表現と同じように、「模倣」は「ジエラシー」と不可分の関係にあり、両者を一体的に考えることが通念化していた点を伺い知ることができる。『ペリ・ヒュプースース』のなかに、「模倣とジエラシー」の具体的な事例として、ホメロスとプラトンの関係について次のような記述を見ることができる——「ホメロスに従順であったの

# SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

## 第二章

擬きとかぎろいの星座

タルド、カイヨワからデリダへ

畠田正人

## はじめに

模倣と創造が、人間ならびに自然のあらゆる事象に係る出来事なし行為として、まさに古くて新しい問題系（プロブレマティック）の最たるものであるということ、この点におそらく異論はあるまい。自分自身の生活を改めて眺めてみれば、名前、髪型、服装、所作、言葉遣い、衣食住、趣味、嗜好、対人関係など、そのすべてが何らかの意味で模倣と創造、むしろ模倣だけと言うべきかもしないが、この問題系と係っていることは明白であろう。日々、世間の耳目を集めているニュースにしても、その項目は、隣国との関係にせよ種々の盗用事件にせよ人物・機関礼賛にせよ、その多くが結局は模倣と創造に収斂していく。声帶模写、パロディは視聴者の最も好むジャンルのひとつで、笑いの源泉となっている。と同時に、類似ゆえに虐げられる者たちもいる。

どのような企業、店舗、制度、イヴェントも、つねにコピーとイノベーションの危うい狭間を揺れ動きながら、あくまで後者を売り物にしてそれを誇示している。この狭間で最ももがき苦しんでいる者たち、それを芸術家と呼ぶことさえできるかもしれない。「レディメイド」（マルセル・デュシャン）のように、この苦悩それ自体を愚弄する試みもすでに存在している。『バクリ経済』（みすず書房）の著者たちは「コピーがイノベーションを刺激する」と言っている。事情は諸学の世界でも同様であろう。先行研究への言及、引用という行為、参考文献表の添付などが雄弁に示しているように、研究とその成果報告も模倣と創造を編み合わせたような営みたらざるをえない。そのことがコピー＆ペースト、著作権・特許権侵害など深刻な問題を産み、今や社会の土台となる根本的「信頼」そのものを蝕んでいるのは誰の目にも明らかであろう。その一方で模倣と創造は、「バイオミミクリ」（biomimicry）のように、諸学の研究対象、研究方法、その針路にも甚大な影響を与えており、その点ではむしろ、医学、生物学の分野での遺伝子クローニング、遺伝子組み換え、万能細胞と再生医療などに何よりもまず触れるべきかもしない。遺伝も再生もまさに模倣なのだから。しかし、それだけではない。「模倣犯」と呼ばれるように犯罪のかたちも、ある疾病的拡散や確

患の様態も、考えてみれば例えは「民主主義」と呼ばれる政治制度も、kamikazeと称されるテロルの方法も、模倣と創造の所産なのである。

思えば、天地の創造、人間の男女の創造をめぐる古代（ペライの物語にも「象り」「類似」という関係性への言及があり、慣例的に旧約、新訳と呼ばれている二つの物語のあいだにも、「予徵」（préfiguration）と呼ばれる関係が想定されることがある。新訳は旧約を「成就」するとも云われるが、新約は種本がまつたくなつわけでもないし、それに單に依拠しているわけでもないのだ。また、Imitatio dei, imitatio christi〔神のまねび、キリストのまねび〕といった語が示しているように、模倣はキリスト教者たちの生を司る根本的原理でもある。では、哲学はどうだらうか。「起源」（アルケー）を解明しようとする試みである限り、哲学も何らかの「創造」と無縁ではありえないし、ここに存在する様々な事物とその「起源」との関係を表すものとしてプラトンの『ティマイオス』で提出されたのが「ミメーション」（模倣）という観念であり、『国家』第十書でプラトンが「ミメーション」に携わる者たち、特に詩人たちを国家から追放しようとしたことはあまりにも有名である。プラトンはなぜかくも「ミメーション」を危険視したのだろうか。それに対しても、アリストテレスはどうと、『詩学』において、それを人間を他の動物たちから区別する人間的本性そのものとみなした。いずれにしても、人間の何たるかが問われているのだ。いや、「それ自体で存在するもの」としての「実体」がスピノザの言うようにひとつしかなく、「様態」と名づけられたすべての「個体・個物」が「実体」ないし「神即自然」のある程度の「表出」である限り、これらすべての「個体・個物」——それ自体が複雑きわまりない錯綜体である——のあいだの諸関係全体が「ミメーション」なのではないか、と筆者は考えていく。

古くて新しい問題系、と言つたけれども、筆者が係つてきた分野では、単に「ミメーション」による問題系が存続しているというだけではなく、むしろ、一九七〇年前後から、ポール・リクール（Paul Ricœur, 1913-2005）、ルネ・ジラール（René Girard, 1923-2015）、ジャック・デリダ（Jacques Derrida, 1930-2004）、ハイコック・ラクター＝ラバルト（Philippe Lacoue-Labarthe, 1940-2007）らによつて、「ミメーション」が哲学的探求の「中心」に置かれたかの感をえあるのだ。なぜそのよだな事態が生じたのだろうか。しかもeconomimesis, déconstruction mimétique, mimesis I, mimesis

II, mimesis III, rivalité mimétique もよもた具合に、「ミメシス」という語の周囲に、それと関連した語群の星座が形成されてもらふ。一体、これらの語は何を意味しているのだろうか。

これらの問い合わせに答えるためのいわば予備作業を行うことが本論の課題である。ただ、予備作業は単なる予備作業ではない。というのも、今列挙した哲学者たちの仕事から逆照し廻行するとき、「ミメシス」の焦点化が突如として生じたのではもちろんなく、むしろそれを用意した多様で豊かな、しかし時に暗渠の「」とく地下に隠れた、一九一二〇世紀ヨーロッパ哲学の水脈が浮き上がってくるからだ。それを筆者に教えてくれたのが、三年にわたる共同研究の定例研究会での諸先生方の講演（この点については本書「後記」を参照）であった。そして、この浮上ないし開渠はこの期間の哲学史の書き換え、組み換えを要求するものですからあるようと思われるのだ。その作業の一部を提示すると、それが本論のいまひとつの課題となる。その意味では、本論はまさに共同研究の成果であると共に、筆者の前著『思想史の名脇役たち』（河出書房新社）の続編としての性格を有してもらっている。先に「星座」（Konstellation）という語を用いたが、はるかな目標あるいは座右の銘としてあえて引用しておくと、「遠く相隔たつた極端なもの、一見発展の過剰と思われるものの中から理念——」のような対立物が有意義に共存できる可能性を特徴とする総体性としての理念——の配置。「星座」を浮かび上がらせね」と（ベンヤミン『ドイツ悲劇の起源』法政大学出版局、三二〔頁〕、それがこゝで試みられたこと）であると言えようか。

## I タルドと模倣

### 1 タルド復興

「希臘における理性的自然の発見、中世における精神としての神の発見に対し、文艺復興以降の近世は、人間の発見をなしているといわれるならば、更に十九世紀は社会の発見をなしたというべきだらう」——、田辺元は、その「種の論理」の嚆矢となる「社会存在の論理」（一九三四—三五年）の冒頭にこう書き記している。実際、socialismeとい

う語はピール・ルルー (Pierre Leroux, 1797-1871) によれば、sociologie という語はオーギュスト・コンドルセ (Auguste Comte, 1798-1857) によって一九世紀に考案され、また、フランス初の社会学の講座にエミール・デュルケム (Emile Durkheim, 1858-1917) がボルドー大学で就任したのは一八九六年のことだった。「社会存在の論理」での田辺も、『道德と宗教の「源泉』でのアンリ・ベルクソン (Henri Bergson, 1859-1941) のトーティズム論を批判的に取り上げるにあたって、ベルクソン自身が同書で論評を加えたデュルケム、リュシアン・レヴィ＝ブリュール (Lucien Lévy-Bruhl, 1857-1939) の社会学的理論を検討している。

ベルクソンはデュルケムとも因縁浅かのわる「社会学者」がいる。近年その評価が頓に高まっているガブリエル・タルド (Gabriel Tarde, 1843-1904)、「社会とは何か。それは模倣 (imitation) である」と明言した人物である。一九〇〇年、ベルクソンと共にコレーシュ・ド・フランスの教授に選ばれた。そのときデュルケムは最終候補者となることやえなかつた。タルドは「近現代哲学」、ベルクソンは「ギリシャとラテン哲学」の講座の担当で、タルドの死後ベルクソンが「近現代哲学」の講座を引き継いだ。一八九九年、コレーシュ・ド・フランス教授就任の話が持ち上がり、たとき、タルドは一度辞退している。「社会学」の講座がコレーシュに創設されてそこで講義を行いたいとの希望ゆえの辞退であつたが、またしてもそれは叶わなかつたのだ。そのタルドとデュルケムのあいだでは一八九四年頃から論争が繰り広げられていた。タルドの存命中はどちらかといふと二番手に甘んじていたデュルケムだったが、タルドの死後、デュルケムは一九一三年、ソルボンヌに初めて設けられた社会学講座の教授に就任、一方、社会学者タルドの名は次第に忘却されていった。

日本では、一九一二年から二八年（大正二年から昭和三年）にかけて、『タルドの社会法則論』『タルドの社会学原理』『未来史の断片』『模倣の法則』『輿論と群衆』とタルドの邦訳が相次いで出版されている。「社会存在の論理」での田辺はタルドに言及していないけれども、中倉智徳が『ガブリエル・タルド—贈与とアソシションの体制』（洛北出版）で「日本におけるタルド研究の動向」として紹介しているように、田辺の弟子にして批判者の戸坂潤がすでに一九三〇年の「イデオロギーの論理学」でタルドの『社会論理（学）』（*La Logique sociale*）に言及し最大級の賛辞

# SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

## 第三章

森鷗外と近代的表現へのアクリティカルな〈問い合わせ〉  
——伝承と自由と、あるいは、ミメーシスとポエーシスと\*

大石直記

## I <身を投げる女>の表象——世紀転換期における再生する古伝承

### 1はじめに

鷗外と漱石——、〈近代日本文学〉成立の礎石を築いたこの二人のまことに稀有なる個性には、東西の文化を高次に架橋しようと共々に挑んだ、その思索過程および創造行為の過程にあって、意外にも知られない応答し合う関係が、実は密やかながらに見出され得る。ここではその具体的なりようを、ほぼ同時期に意義深く生成した二つの重要なテクストに即することで考察してみたい。それは、遙か「万葉集」の昔から、日本人の性（Mentality）の歴史に深く喰い入り続けた〈身を投げる女〉の古伝承に象徴的なかたちで体現される、日本人にとっての、実に根源的（radical）となすべき伝承された倫理性へと、ほぼ同時的に両者が係わりを示しつつ深めた〈問い〉にまつわることとして、である。

これを換言すれば、〈西欧近代〉が次第にその〈光〉と〈闇〉とを危機的に宿し始めた、〈モデルネ Das Moderne〉<sup>(1)</sup>とも称される例の〈世紀転換期 Jahrhunderwende〉<sup>(2)</sup>の精神状況と鷗外・漱石がそれぞれに対峙しながら、奇しくもその、日本人の性を象徴する如き古伝承と各個において向かい合い、その意義を蘇生・再生させようと試みた、正に、注目すべき〈痕跡〉をめぐっての考察、探究とはなる。またそのことを通じて、両者が広く同時代的コンテクストを共有しながら、混沌を極め始めた西欧文化の動態をそれぞれに感受しつつ、見失われいく古伝承にいかなる変形を加え、かつ、そこに潜められていた可能性をいかにして掘り起し、これをどのように継承しようと試みたかを、〈近代〉以降の〈生〉の行き詰まりが更に一層深刻度を増して複雑化していく、この二一世紀初頭の現在時において問い合わせてみることなのである——。それはまた、本書全体のより深い、普遍性を帯びた〈問い〉、すなわち、〈模倣〉と〈創造〉との係わりについて、その具体相を、日本の表現史上の重大な局面として、如実に浮かび上がらせることと連結することとなるだろう。

## 2 自口否定性

どの国にあっても、その国に固有の文化のアイデンティティへと深く突き刺さる、未だ文字化を伴わぬ遙か太古から、元来は口頭によつて長く伝えられた、文化の基層をなすような倫理性を特徴的に表示するが如き古き伝承が、それぞれに存在したであろう。日本にあつては、西欧との出会い以前、すなわち、マックス・ウェーバー言うところの〈普遍史 Die Universalgeschichte〉が、合理性の名の下、西欧において特殊的に志向された〈近代〉（「宗教社会学論集序言」<sup>(3)</sup>）といふ時代と当面し、経験することになる、その遙か以前より、そのようなものの代表として、日本人のメンタリティの奥底深くに喰い入つていた、人間の、一つの〈死〉のかたちの原型を鮮やに表象してみせる、連綿として受け継がれた古伝承が、正に、滔々たる水脈をなした忘れ得ぬ事実がある。

それは、そもそも、ほぼ日本全域に広まつてゐた口頭での言い伝えに基づきつつ、およそ二千年前の日本人の心意を集約するかの如く編まれた、かの「万葉集」以来の、それ 자체が口承性をも色濃く残存させる、日本に固有の韻文ジャンルたる〈和歌〉といふ伝統的表現形式の中において繰り返し題材とされ、文字化されることを得ることで、今まで受け継がれたものである。曰く、かの〈処女塚伝説〉が、それにほかならない。

現在でもそれは、日本の学校教育制度の内部にあつて、日本文学の伝統の中で長らく正統であつた古典和歌の教育に際して、日本人なら必ずや誰しもが知つておくべき文学教材として採り上げられ続けているものとなつてゐる。それが受け継がれなければならない近代以前にあつた、民間に流布した口頭伝承としての眞の意義は、今ではほとんど、その内実が風化し、形骸と化してしまつてゐるにしても、である。

一方またそれは、日本の優れた古典芸能として、〈世紀転換期〉西欧でフーゴー・フォン・ホフマンスターールによって着目されて以来、世界的にもよく知られるに至つた、あの濃密なる象徴性を帶びた中世日本の演劇ジャンル、詩劇としての〈能〉においても、その数多存在する古本、いわゆる〈謡曲〉——その近代日本における集成は、漱石門下唯一の女性作家・野上弥生子の夫・野上豊一郎等によつて行われたことは、本章の主題上、大いに注目に値する——

の最も重要なものの一つとして、「求塚」の名で伝えられ、今なお舞台上で演じられ、古典教育における実践目的とはおよそ離れたところで確かに生き永らえ、保持され続けている事実も、無論のこと、忘れてはならない。その意味では、細々とではあれ、この古伝承は、いわば「生きづける伝説」として、現代においても、日本人の心意の深層にそれと意識されないままに深く潜行しつつ、時の風化作用に抗するよう、確実にその命脈を保たれ続けているのである。

さて、その基となつた口頭伝承とは、その時代時代においてみられる、伝えられる際の区々の細部 (details) の違ひ、その時々の変形要因を敢えて捨象して、その話材の中核的要素のみを抽出してみれば、大略、次の様にもなる。すなわち、ある国に住む一人の美しい年若い「処女」<sup>おとめ</sup>が、二つの隣国、姿かたちのよく似た二人の男から、あるときに、強く執拗な求愛を受け、その板挟みの状態の中で深く悩み続けた挙句に、いずれの男からの求愛を選び取ることをせず、その心境を憐れ深い一首の歌に込め、これを辞世の言葉の如くにも遺して、自ら進んで近くの川へと身を投げて果てる、という話柄である。よく知られる「真間のてこな」の伝説は、その一体として今日最もよく流布している。が、それ以上に重要な古形を留めたテクストとなるのは、古くから伝えられた数多の和歌の、それぞれの成立事情を物語化して伝えた「歌物語」なるジャンルを代表するものとして、かの「伊勢物語」とも併称される和歌説話の集成たる作者未詳の「大和物語」中において、最も纏まつたかたちで簡明に形象化され、広く知られている。

すみわびぬ我が身投げてむ津の国の生田の川は名のみなりけり

という、例の古歌の成立を伝えた説話なし物語は、『処女』が身を投げた川の名に因み、「生田川伝説」ともまた名づけられる。

この、いつの頃からか伝承され続けた古き伝説は、日本文学の極めて長きに亘る歴史において、多くのヴァリアン

トをも豊かに派生させつつ、また、様々な表現を生成させ続けてきたことは、ここに敢えて贅言を費やすまでもないほどに知名の事柄に属する。それは、日本の物語史上の重要な祖形としての重要な役割を担ってきた（「源氏物語」の浮舟の物語などもその系列に属するものとされる）。

しかしそればかりでなく、同時に注目すべきは、それが、文字化以前の伝承形態を示すものとして、日本の至る所に、三つの墓石が並んで立つ特異なかたちの墳墓、すなわち〈塚〉としても数多残されているという興味深い事実である。そもそも、この古き伝説に係わる言語的伝承の主たる担い手となつたであろう古来の〈うたびと〉たちは、例えば、高橋虫麻呂の伝承性の色濃い長歌および反歌などがその好個の例証であるように、旅の途次にあって、こうした〈塚〉の立つ場所を通過していく、正にその折、しばしその場に佇んで、あたかも死者の魂を《憐れみ》、また、鎮めるようにして、優れた歌を詠み残すこと繰り返し続けた。その代表として残る遺跡は、神戸は今灘区、蘆屋の地に、現在、〈処女塚〉と呼ばれる大きな古墳をその中心として存在し、各地に散在した伝承を正に集約する〈場〉の如く、その実に広やかなる地勢において祀られてある。このことから、その伝承名は、古来の、悠久の時の溶け込んだ靈性を帶びた〈トポス〉に纏わるものとして、先述の通り、〈処女塚伝説〉と、より一般化されることとなつているのではある。

三つの墓石が並び立つ、そのかたちとは、身を投げた女と、また、その跡を追つて身を投げた二人の男たちの相繼々自死行為をそのままに、古き物語を象徴する如く空間的に配置されたものである。そして、先の「大和物語」の叙述に従えば、そのような特異なかたちに墓が並んで立てられたのは、いわば、後追い自殺した二人の男の親たちが、その出来事を《憐れ》んでのこととして伝えられる。この、三つの墓石なし〈塚〉が並び立つ空間的配置が、それをする者たちの内心に生き活きと、遠き古き世の日本人の〈生〉のかたちへの詩的想像力を繰り返し喚起し、その都度、言語的表出を促し、今日に伝わる文字によっての定着を、様々なる変形をも伴いつつ可能してきたのである。これは、いわば、日本に残された〈自死〉に関する、正に、最古層に横たわり、継承され来たつた〈根源的な物語〉そのものとなる――。

さて、日本人と「自死」というテーマは一般に、主として武士道ないし儒教道徳との係わりという側面から、日本人の存在様式の象徴でもあるかの如く、ある種の禍々しき採り上げ方がなされて久しい。曰く、「腹きり」や「殉死」は、あたかも日本的心性を最もよく代表する、不可解極まる「死の美学」でもあるかのように、近代以降、より正確には戦後において、国内外に渡つて好んで語られるのである。しかしそれは、おおよそ中世期に端を発し江戸時代に固定化した、歴史上、ある時期からの、特定の集団ないし共同体のモラル、または、美学の如きものの、歴史的表現として、でしかない。総じてそれは、まるで日本文化の根底をなすものの如く、全体に対する個の犠牲、という「自死」の物語を安直にも惹起し、形成し続けたのである。

がしかし、先述の通り、時代を更に遠く遡り、日本人が伝えた「自死」の物語を、深くその古層へと掘り下げていく時、実は、特定の時代的道徳や宗教的規範性などという、いわば、制度的に強いられた「自己犠牲」性とはおよそ異なる、むしろ具体的な人間同士の関係性においての「自死」のかたち、ないし他者との関係性において選択される「生」についての、恐らくは日本に固有の倫理性のかたち、その表現としてのより根源的なありかたが浮上する。それが、ここで問おうとする「処女塚伝説」として集約的に表現されたもの、その起源すらもはや知りようもない、集團的表象としての「自死」にほかならない。しかしそれを、何らかの「主体的」選択による「自死」と呼ぶことは、余りに近代的に過ぎ、やはり慎重な留保が必要とされる。近代個人主義的主体概念によつては説明し切れないものを、この日本人が長らく好尚し続けた伝説は、内包し表示するからである。ここに問われるべきは、右記の如き何らかの実定的な社会的擬制（fiction）との関係における人間の死といふのでない、より原基的にして纖細な、人の心性そのものありようとこそ深く係わった「自死」の伝承が、まことに緩やかに、また気の遠くなる如き長い時間とともに日本の文化的伝統の奥底にあつて継承され続けてきたということ——、そのこと自体の意味ないし意義である。それは、形式倫理的な硬い概念化を安易にしてはならないような、人間の「生」の具体性とこそ実は深く切り結んでいる、と考えられなければならないからである。

## 後記——本書成立の経緯

大石直記

本書は「明治大学人文科学研究所叢書」の一冊として刊行される。これを世に問うに当たって、以下、その成立の背景およびその経緯におおまかに触れておくこととしたい。

私が文学部専任教授として明治大学に着任したのは二〇一〇年の四月であった。当時私は数年かけて、中世和歌研究の第一人者である畏友・渡部泰明氏（東京大学大学院教授）とともに発足した岩波書店の研究プロジェクトとして、「到来することば」研究会を定期的に続けていた。そこには、源氏物語研究で知られる松井健児氏（駒澤大学教授）も参加し、また文学・思想等、実に多領域に跨る、多くの若手研究者が集っていた。研究会の趣旨は、メディア論的な傾向を強めていた当時の文学研究に飽き足らない想いを持つて、そもそも私たちにとって〈文学的体験〉とは何であったかということを、改めて、その原点に立ち戻つて問うことについた。そこでは、予言として顕現する文学、また、因果律によつて整除されることない文学が本来的に有する、その精妙なる生理とでも呼ぶべきもの、そうした、研究者である前に読者としての私たちが向き合つてゐる何事かを、時代を問わず具体的に検討していくことが目指されていだ。

その長年の成果を岩波書店の雑誌『文学』に特集として結実させる、研究会も終盤に差し掛かつて、私は、新たに同僚となつた井戸田總一郎氏、合田正人氏を研究会にお誘いして、研究発表をお願いした。本書の共同執筆者である両氏との出会いは、そのようにして始まつた。『文学』特集号（「到来することば」、二〇一一年一月）が刊行され、研究会は一応の収束を見、解散した。なお、同特集号巻頭には、渡部泰明氏、松井健児氏、合田正人氏、そして私、に

よる、いささか稀有な内容の座談会が置かれ、以下、研究会参加者全員の渾身の論考が並んだ。

井戸田氏と合田氏とは、その趣旨を継承しつつ、何らかの研究プロジェクトを始めようということになった。上述のような行き掛かり上、赴任して間もない私が研究代表者となつて、自身かねて永く温め続けてきた問題関心をまとめて、明治大学人文科学研究所（当時、社会学者・杉山光信先生が所長であった）「総合研究」第二種に応募した。が、幸いにも、そのプロジェクトは同委員会によって採択されて、本書の基となつた「模倣と創造——日本とヨーロッパの文化継承の現象学」として、三年間に亘る共同研究を立ち上げることとなつた。それが、本書がなるに当たつての初発の経緯であつた。ここでは、その共同研究が以後、どのように推移していくか、その概略を記しておきたい。なお、私は、諸般の事情によつて、今は離職している。

さて、二〇一一年度より、明治大学人文科学研究所・総合研究第二種として、大石（日本近代文学、当時専任教授）が研究代表者となり、井戸田総一郎（ドイツ文学、専任教授。以下敬称略。）、合田正人（現代フランス哲学思想、専任教授。以下敬称略。）を共同研究者として右記の共同研究を始動させた。その発足に当たつての人文科学研究所に提出・採択された趣意文の一部を試みにここに摘記、引用すれば、以下の如くである。

「……近代以降、文学・芸術を始めとする凡ての表現行為をその根底において支え、価値付けてきたものは、正しく〈オリジナリティ（独創的であること）〉を追い求めようとする志向性であつたことは疑い得ない。それは今日なお自明性を帶びた絶対的原理のごとく創造的営み一般を促す駆動因として信じられて、搖るぎがたい位置を与えられ続けている。が、それは、個人を創造主体として絶対化する観念の発生と展開という、すぐれて近代的なといつていい人間認識を、その基盤とすることによつて初めて形成されたものである。従つて、実はそのような志向性 자체が、〈近代〉という時代の個人主義思想を色濃く刻印された歴史的な所産としての性格を帶びているのである。しかしながら、実際に創造的営みがなされるに当たつては、決して独創性ばかりが至高の価値として働くのではない。むしろそこには、近代化の進行とともに後景へと追いやられ、排除されていったかにみえる〈模倣〉ないしは〈ミメーシス〉という契

機が、個々の具体的な表現の現場にあって、自覺的であると無自覺的であるとを問わず、創造主体の内部において絶えず重要な条件として看過しがたく動的に息づき、働いていると考へてみると必要がある。

本研究では、近代以降の文化的創造においても、実は依然として、陰に陽に極要な位置を占め続けているはずの「模倣」あるいは「ミメーション」という契機の緊要なる意義を掘り起こし、これをめぐっての省察を原理的に推し進めるとともに、具体的な事例・現象に極力即することによって、日本とヨーロッパ双方の視角から、近代において「模倣」「ミメーション」なる要件が活きて働く諸相への問い合わせを試みていただきたい。そのことは、文化が繼承されいく際のダイナミズムを、その生態において浮かび上がらせる試行であると同時に、往々にして、過去の長い歴史からの断裂の相の下に捉えられるがちな「近代性」とはそもそもなんであつたか、をめぐる根源に遡つての探究でもある。

以上をより具体的に言い換えるならば、ここで試みられるのは、「模倣」と文化の連續性という普遍的問題領域へと深く測鉛を下して、フランス思想史およびニーチェを中心としたドイツ文学思想の双方からの大膽なアプローチを開しつつ、それらとの正に重層的連関性において、理論的かつ実証的に、日本近代文学の動的様態を捉えていこうとすることであるにほかならない。目指すところは、西欧にあって古来、そして今なお、絶えず重大な問題であり続けている「ミメーション」という契機の積極的導入を試みることによって、近代日本の文学・文化万般における創造的營為の豊かであつた具体的様相へ向けての、従来にないかたちでの、広く世界文学的視野からの逆照射を、実践的に、かつ、協同的に試みていくということに置かれる。そこに浮かび上るのは、東西両文化を、いわば、架橋する近代における創造の歴史の動態でこそある。……」（文責・大石）

初年度となつた二〇一一年は、主として「模倣」ないし「ミメーション」問題の原理的研究を企図しつつ、また、問題枠の外延と内包を確定するべく、現代の哲学・思想の領域におけるホットなテーマである「ミメーション」をめぐつて考察を深めていくこととし、多彩な講師陣を学外から多く招聘するかたちで強い意欲と共に立ち上げることとなつた。先ずは、共同研究者である井戸田総一郎、合田正人、大石それぞれの抱懐する問題関心を深め、その問題圏域の

具体を相互に確認し合うことから始め、次第に、多角的、かつ、原理論的な議論を積み重ねることを試みていくこととした。

しかしながら、二〇一一年度は、折りしも起こった東日本大震災、福島の原発事故という、正に国難とも言うべき未曾有の災厄が勃発し、進行する中にあって、当初の予定よりかなりの遅れを以て始めるなどを、私たちは不幸にして余儀なくされた。しかし、かえってそのような異様に緊迫した状況下での出立が故か、初年度の共同研究の活動内容は、以下に記すとおり、予想外の豊かな実りを結果するものとなつた。それは偏に、共同研究者全員、また、本研究に賛同の意思を惜しまなかつた協力者の人々が、文化の継承という重い課題を、また、近代の科学技術が想像を絶する惨事を現実にもたらしたことで、自分たちが今問うべきことは何であるかを、よりリアルに実感させられたことによるのだと思われる——。当時、大石は、兵藤裕己氏（日本中世文学、学習院大学教授）の呼びかけによつて発足したばかりの岩波書店での新たな研究プロジェクト「夢研究会」（本学からは、フランス文学専攻の根本美佐子氏が参加した）の初度の会合において、危機的な状況下にあつて、文学思想の研究をどのように進めるか、を参加者各自が、言葉を失いつつ深刻に受け止める場面に遭遇することになつたことを今も鮮やかに記憶している。恐らくは、敢えて言葉に出さなかつたものの、私たちの共同研究も、同様な想いを胸に、あるやりきれなさと絶望感とを共有していたのだと思われる。だからこそ、以後の奇しき情熱の共有が可能となつたと思わざにはいられない。その意味では、この共同研究は、ある種、想像もしなかつたような規模と深みとを持つに至つた。不思議な使命感が、多くの人々を瞬く間もなく、つないでいった。

さて、右記のとおり、常軌を逸した状況下に、ようやく六月半ばより本格的に始動した本共同研究は、以後、〈近代〉は何をもたらしたのか、の問いを実際にリアルに深く内在させながら、毎月のように、創造行為一般にとつての根源的原理たる〈模倣〉ないし〈ミメーシス〉をめぐつての原理論的探究を、各界の現在望みうる優れた人材を講師として招聘することによって出立し、各講師による真摯にして濃密な講演を積み重ね、また、それをめぐつての白熱する討議を展開することと相成つた。そのことには、実に望外の感があつた。喫緊な状況が私たちを含め多くの人々を拉し

去るかのようにして、三年間、変わることない身を削るような活動へと駆り立てたのであった。主題とすることの性格上、当初は、多くの参加者の賛同を得られたとも言いがたかったが、東京大学・京都大学を始めとした多くの有志の参加を、回を追う毎に増やしていくことで、議論は自ずと熱氣を帯びることとはなつた。毎回の講演とそれをめぐる討議は、優に五、六時間にも及び、終了後もなお、場所を移して時の過ぎるのを忘れて語り合つた。それはいつしか、人文科学研究の徒である自らの根拠をそれぞれに喫緊な想いとともに掘り下げる稀有の場となっていたのである……。

以下に、二〇一一年度に実施された定例会の、記念すべき実施内容を試みに列挙する。

- 第一回（六月）「怖れと憐れみのリズム——ハイデッガーとブランショ」西山達也（現在、西南学院大学准教授）
- 第二回（七月）「ルネ・ジラールとミメーションの概念」ポール・デュムシェル（立命館大学教授）
- 第三回（一〇月）「ガブリエル・タルドと模倣の社会学」村澤真保呂（龍谷大学教授）
- 第四回（一一月）「アドルノにおけるミメーション概念」徳永恂（大阪大学名誉教授）
- 第五回（一二月）「ベンヤミンにおけるミメーション概念」森田團（西南学院大学教授）
- 第六回（一月）「マルティン・ブーバー＝フランツ・ロトゼンツヴァイクによる旧約聖書翻訳をめぐる問題」小野文生（当時、京都大学助教、現・同志社大学准教授）
- 第七回（三月）「布置と再布置」みえのふみあき（詩人）

以上が、ほぼ毎月のように行われた初年度における定例会での講演の全容である。が、この年度における最大の収穫はなんと言つても、三月に、本邦初来日となつた、いまだ日本では知られることの少ない思想家ダニエル・シボニー氏の招請を実現し得たことであつた。シボニー氏は現代フランス思想界において、活発かつ旺盛な言論活動を展開する有数の哲学者・思想家・精神分析医の一人であつて、その論陣は文化創造の基底に関わる実に深遠な問題領域へと

アクチユアルに測鉛を下ろすものだからにはかならない。岡氏の、一週間の日本滞在期間中、二度に亘って、哲学・宗教それぞれを主題としての講演会を挙行し得たことは、年度を締め括るに当たって大いなる成果であった。それは、あたかも二〇一六年の現在の、テロリズムの蔓延する出口のない世界的な難局を先取りするかの如き、ある危うさとも厳しく隣接した講演内容となつた。これに際して、共同研究者・合田の縦横の働きがあつたことをここに特筆しておきたい。合田は、困難と思われた招聘交渉を粘り強く行うとともに、いまだ日本で紹介されていないこの思想家についての書き下ろし論考（「新『神学政治論』へ向けて——レヴィナス以降の宗教批判と現代世界」、「ナマール」第一六号、二〇一一・一一、神戸・ユダヤ文化研究会）を執筆しきつゝ、その主要な著書の部分訳（「自己贈与か、自己分割か」、抄訳『現代思想』臨時増刊「レヴィナス特集」、二〇一二・三、青土社）を行い、これを発表した。さらに同氏への対論的なインタビューを行い、公表した。この初年度のスリリングな研究活動の展開が、その後の方針を一面において決定付けたと言えるだろう。

ところで、この共同研究の立ち上げに当たって、そもそも、研究代表者・大石の念頭にあったことに触れれば、前掲した発足趣旨にもある通り、日本の文学・思想における、西欧文化との出会い（西洋の衝撃 western impact）による近代化過程の、その特殊的な様態を根底から問い直し、いくばくかでもそのアクチユアリティを掘り起こし、そこに潜む諸種の問題性を明らかにしていくことにはかならなかつた。その際、最も重要な存在として注視されたのは、日本文学の近代化に多角的に深く関与した森鷗外である。その生涯に亘っての旺盛にして多彩なかたちを採つた、異数となすべきその「近代」をめぐる思索および、その表現行為において如実にも表れた創造の原理の、特殊具体的なる潜勢的な発動は、正に「模倣」ないし「ミメーシス」問題へと限りなく接近していく営為と目された。そして、奇しくも二〇一二年は鷗外の生誕一五〇年というミレニアム・イヤーに当たり、そこを目指すことが、共同研究者三人のそもそも共有された目論みとしてあつたのである。

右記の目的を実現するべく、それぞれが旺盛な活動を個別に示し続けた。井戸田は、今までの鷗外をめぐる自ら

の諸論考を中心に二〇一二年四月、鷗外研究史上、画期をなすと言つていい一書を世に問うた『演劇場裏の詩人 森鷗外——若き日の演劇・劇場論を読む』、慶應義塾大学出版会）。合田は、鷗外と遠縁に当たる同郷の思想家にして日本への哲学の搬入者であつた西周に注視していく中で、日本における〈哲学〉の発生問題を捉えようとの試みを示し、さらには日本における〈哲学〉の可能性を示現したものとして思想家・田辺元の生涯にわたる思索的嘗為を、その視界の前景に収めた。その成果は、雑誌『思想』（岩波書店）に、異例なほどの大部の論考として一挙掲載を見た（「近迫と渦琉」、『思想』、二〇一二年一月 田辺元特集号）。また、大石は、全国大学国語国文学会二〇一一年度春季大会において、同学会からの依頼に応じる形で「近代文学における古典の〈受容〉と〈変革〉」のタイトルの下、大会シンポジウム（於・東洋大学）のコーディネイターおよび基調報告者を務め、対外的にも本共同研究の展開を企てた。その成果は、同学会の機関誌『文学語学』（二〇一一・一一）に掲載をみた。そこでの大石の基調報告は正に、本共同研究のテーマの核心部分を反映する形で、「鷗外のアクチュアリティ——〈模倣〉と〈創造〉、その抗争様態」と題された。同シンポジウムにおいてはまた、鷗外のみでなく、泉鏡花・谷崎潤一郎・芥川龍之介・堀辰雄など日本文学の近代にとって重要な位置を占める表現者たちが、その討議の対象とされ、壇上に立ったパネリストたち（竹内清巳、鈴木啓子、日高佳紀、庄司達也）それぞれによつて、〈古典〉との緊張関係における、各作家の創造の現場の問題が検討に付されることとなつた。

以上のような、個々の旺盛な活動を伴いつつ展開をみる中で、〈模倣〉と〈創造〉との問題は、日本文学、さらには文化万般にあつての連続と非連続という二契機の微妙にして精妙なる係わりといふ問題系へと大きく転回されて、さまざまなかたちで、初年度において問われていくことになつた。いわば、非西欧圏において進行した近代化とは、伝統的文化の継承と変革との複雑に絡み合つたダイナミズムとして、その具体相が掘り起こされなければならぬ歴史の活断層であるにほかならないとの認識は、如上の活動を多角的に、また鋭意、展開する過程において、鮮明に浮かび上がり、また、共同研究者各自の前もつて抱かれた問題関心は、そのような問題圏域にあつて更に一層具体的に拡充されつつ、縦横に押し広げられることとなつた。

常ならざる現実の切迫を絶えず総身に感じながら、孜々として定例会を恒常的に企画・運営していく中で、望外にも、学外からの選りすぐりの賛同者たち、とりわけ、若い俊秀・気鋭との出会いは生じていき、語の正確な意味での、領域横断的な思索体験が正に協同的に現出する「場」を開き得たことは、以後の活動へ向けての礎石として、思いがけない果実となつて我々にもたらされた。これを引き継ぎつつ、粘り強く展開していくことが、私たちにとつて課せられたものとして次第に重みを増していったのである。

以上、初年度となつた二〇一一年は稀にみる不思議なほどの熱氣とともに推移し、主として「模倣」ないし「ミメーションス」問題の原理的探究を企図しつつ、また、問題枠の外延と内包を確定するべく、現代の哲学・思想の領域における根源的で、ホットなテーマを多彩な講師陣を学外から多く招聘するかたちで強い意欲と共に立ち上げることとなつたのであつた。幸いにも、次第に学外に多くの賛同者を得て、それら有志の参加者を交えての討議が毎回のようになされたが、そこで自ずと構築された白熱した討議の場を如何に続行していくか、また、その流れの中で当初の企図をさらに一層、弛むことなく拡充することが自然の成り行きとして自覚されることとなり、伸び拡がる思索と討議の場は、留まるところを知らなかつた。

が、一方、初年度はいささか原理論に偏し、また、西欧近現代の思想・哲学におけるミメーションス問題に拘泥しそぎた嫌いがあつたこともまた事実であつた。そこでは、議論の膠着、行き詰まりも意識されなくはなかつた。そのような反省の上に立つて、二年目を迎えた二〇一二年度は、初年度での深まりゆく原理論的探究の成果を充分に踏まえながらも、議論の枠組みを日本の文化伝統の方へと一旦、組み換えつつ押し広げようとし、また更には、より表現の具體性への志向を持たせること、そして公開性と対話性を一層重視したことによつて、二〇一一年度とは、いささか趣を異にする講師陣を招いて推進されていくこととなつた。

具体的には、日本の文学・文化において「模倣」行為が、古来どのように創造の現場において機能し、また、新たな美的価値を過去の表現との関係において実現したのかを考察の日程に載せることを念頭に置きつつ、また実践的な表現における問題の追究を目指として歩み出した。手始めに、日本の文化伝統にあつても先行するテクストとの関わ

りにおいて極めて自覚的で、成熟した表現行為が行われたと目される中世期にあつての和歌文学における〈模倣的思考〉のかたちへの問いを、新古今和歌集的な表現方法に特化することとし、目下その専門領域における第一線の研究家を招いて、考察・討議することを先ずは試みた。講師を、そもそもの発端となつた先述の「到来することば」研究会の発起人の一人でもあつた東京大学大学院教授・渡部泰明氏に依頼し快諾を得、実に力のこもつた先進的な〈新古今的世界〉を、表現の具体に即して呈示して頂くことができた。ここに発足以前からの研究テーマとの継続性もまた甦り、更に重層性を増すこととなつた。

如上の試みは、更に受け継がれて、同じく中世期日本の文化の中核に開花した演劇として、能楽における〈模倣〉の意義について、法政大学能楽研究所所長・山中玲子氏による講演へと展開された。またその際、同氏のはからいによつて、現在、能楽の伝統を先端的に受け継いで活動しておられる能楽師・友枝雄人氏による技芸の身体的な継承の実際についての貴重な体験談を、演技を交えて伺うことを行ひ得たことは望外のことであつた。

更にまた、その会場において積極的に討議に参加して下さった、当時、先の〈夢〉研究会の主宰者であった学習院大学教授・兵藤裕己氏に協力を依頼し、これを大学院教育へと連動させることを考慮した上で、本学の「大学院特別講義」の枠を活用するかたちで実現することとした。同氏は、大学院文学研究科の多くの大学院生および同スタッフを聴衆として、日本の物語文学の伝統と近代小説との係わり、ことに泉鏡花の文体的特質における〈かたり〉の繼承性を問題化しつつ斬新な視角を呈示され、實に示唆深く、また大いに有益なものとなつた。そこでは、日本における〈倣い〉と西洋における〈ミメーシス〉の差異を自覚化する上で、重要な論点が多く提起された。

以後、現代を代表する俳人・井上弘美氏の実作体験、ミュンヘン大学教授ハンス・ペーター・バイヤーデルファー氏を招聘しての二度の講演等、多く聴衆を集め、議論の幅は自ずと拡充された。

が、二〇一二年度の最大の成果としてここに特筆したいのは、当初の企図を実現するかたちで、生誕一五〇周年を迎えた近代日本の巨人とすべき森鷗外に係わる記念行事を学外において、陸続と挙行し得たことである。そのひとつは、アルザスにある欧州日本学研究所の依頼で行つた、明治大学文学研究科主催の国際シンポジウム「多面体として

の森鷗外——生誕一五〇周年に寄せて」（二〇一二・一二）であり大石が学術責任者を務め、二日間に亘る同シンポジウムには、早稲田大学教授・中島国彦氏、ベルリンの森鷗外記念館副所長ベアーテ・ヴォンデ氏、ストラスブール大学のヴィルジニー・フェルモー氏等々のほか、大学院生も含めた本学の大学院スタッフも多く参加し、同研究所の開設に重要な役割を担つた欧州における日本文化研究の泰斗であり、日本近代文学研究に大きく寄与された故ジャニ・ジャック・オリガス氏へのトリビュートとの性格をも与えることが出来た。さらには、明治大学人文科学研究所と文京区立森鷗外記念館の共同開催となつた「光源としての森鷗外——いま、〈近代〉を問い合わせ返す」と題する長時間に及ぶシンポジウム（二〇一三・三・六）があつた。その企画には井戸田・大石が当たり、延々八時間に及ぶ基調報告および協同討議となつた。これらは、この年に国内外で行われた同種の企画・式典の中でも、ひときわ充実した重厚なものとなつたことを誇りとしたい。鷗外の文業を通して、近代を、また、その伝統との繼承関係を鋭角に問うことになつたからである（またこれは、二〇一二年一一月、鷗外ゆかりの地・小倉において行われた、やはり明治大学人文科学研究所恒例の学外公開講座「鷗外・その多面的なる耀き」）とも連動するものであつた。講演者…小泉浩一郎、田中実、井戸田、大石）。そこでは、井戸田・大石の他、宗像和重（早稲田大学教授）、小泉浩一郎（東海大学名譽教授）、高橋義人（京都大学名譽教授、「ゲーテ自然科学の集い」主宰者）がパネリストとして登壇した。異例に長丁場のシンポジウムとなつたが、聴衆は多く、会場は研究者のみでなく、一般の熱心な参加者によって埋めつくされた。東西の文化を架橋した鷗外という存在の大きさばかりでなく、日本の近代文化の建設に大きな足跡を遺したその性格から、古今東西の文化が縦横に交錯し合う、稀有な議論の場が現出したことを以て、これらの企画は、この共同研究、第二年度の成果とし、また、最終年度の活動への多くの課題を改めて抱え込むこととなつた。ここによつやく、元来の研究目的の達成へ向けてのテーマの照準、その射程が定まつたとの感を抱き得た。

二〇一三年度、三年間に亘つた総合研究も、遂に終了の年を迎えた。この間、実に多くの賛同者の参加を得て、国内外に大きな拡がりを持つとともに、縦横に伸び拡がる、壮大な知的世界を切り拓き得たとの自負はあつたが、後は、

これをどのように研究成果報告としてまとめ上げて出版し、世に問うことが出来るか、という課題が残されていた。

しかし、最終年度も、単に収束の仕方ばかりを顧慮することなく、これまで通りに、定例会の開催を続行しつつ、討議を繰り返すことを倦むことなく実施していった。その点では、三年間、一貫した研究スタイルを取り、そのかたちでの成果も、活字化して世に問うべき実質を十分に保持し得ていた。またそれを、考え得るあらゆる機会を捉え、活用して実行していくことが、従来の、共同研究の枠を、いい意味で逸脱し、多くの人々を巻き込みつつ、ある種、優れた実践性を帯びた、協同的で、自由な知的・学的時空を現出していったのであり、それは容易に手放すことのできない、一種の運動体を形成しつつあることが有志の参加者をも含め、ここに集う各個において強く自覚されていた。もとより、内外の講演者ばかりを招聘するそのスタイルを問題視する心無い声がないではなかった。が、私たちは、敢えて、多声的であることをを目指していたのであり、その方針に搖るぎはなかつた。その方針に賛同し、薄謝にも関わらず重厚な論を以て応じてくださった講演者の方々の力に私たちは励まされて共同研究を力の限り、推し進めていたのである。従つて、最終年度といえども、その基本路線は飽くまで堅持する必要があつたのである。もはや、それは、共同研究者である私たちだけの場ではなかつた――。

とは言え、それとは別に、二〇一三年度は、基本路線を踏襲し拡充しつつ、また、その集大成としての性格をも備える必要があつた。そこで、以下の三つの大きな企画を、私たちは目論み、それを企画・実践することに敢えて、主眼を置くこととなつた。いわば、思索と討議の共同的な場は、さらに一層大きなものとする道が選ばれたのである

①「京都セッション」・同志社大学の協賛を得て、一〇月一九、二〇の両日、終日、多くの発表者を招聘し、大々的な、また、領域を横断するような試みを、恐らくは、どの様な専門学会でも実現し得ない規模とかたちで挙行すること。（於・同志社大学）

②パリ第七大学、すなわち、ディドロ大学との共催として、同大学を中心としたフランスの研究者とセミナーを開催すること。（二〇一四・一・二一、於・パリ第七大学）

③ストラスブール大学へ赴いて、〈文化の継承〉問題として、シンポジウムを開催すること。（二〇一四・一・二三、於・ストラスブール大学）

さて、以上の三つの試みとともに、過去二年間の研究成果に基づき、共同研究者三名それぞれの拡充された問題関心の上に立脚し、二〇一三年度は、その統合を図りつつ、更に一層、問題枠の拡大を大幅に行うことによつて、果敢に締めくくろうと試みたのであつた。それは、追つて、出版されることになる成果報告書の構想を共同研究者の今後の思索の深化および執筆活動の自由かつ闊達な展開へ向けて、より開かれた場を、三者それが自らのために用意することであり、また、多くの賛同者の方々の期待に応えることでもあつた。

過去二年に亘る定例会（二か月に一度のハイ・ペースを以て半公開性で実施）を中心とした研究活動のありようは、努めて多くの関連領域の第一線の、ないし、気鋭の研究者を講演者として招くことによつて、毎回、濃密かつ自由な思考の磁場を生みだし、共同研究者各個のそれぞれの問題関心を、根底から揺るがしつつ、当該テーマの問題圏域を多くの知性の結集と共に、拡大、また、集約することの両極へむけてのダイナミックな運動を引き起こすことが目指された。

歴史上、今日に至るまでの多くの思想家たちの繰り広げた、先鋭で原理的な、〈模倣〉ないし〈ミメーシス〉をめぐつての論議の問題圏の可能的潜在性を測定していくために、先述の通り、最終年度も、基本的には、同じスタイルが踏襲されたのだが、そこでの狙いは国際性を意識して、海外の思想家・研究者を招くことにおいて、特色が新たに加えられた。フランスからは、フランソワリダヴィッド・セバー氏、チエコからは、カレル・ノヴォトニ氏が招聘されて、それぞれエマニュエル・レビイナス、ヤン・パトチカに関する最新の研究成果を展開してもらい、問題枠は、新たに現象学的な拡大をみた。

ある意味で、自づからにして、また多くの偶然の出会いにも支えられて、飽くことなく拡がりを与えた本共同

研究テーマは、最終的に、共同研究者三名が、東京を離れ、先ずは京都へと赴き、同志社大学とのコラボレートによる大々的な研究集会を「京都セッション」と名付けて行うかたちを取り、パリ大学のフランク・ディディエ氏、京都大学名誉教授・上山安敏氏、大阪大学名誉教授・徳永恂氏を特別講演者としてゲストにお招きし、記念碑的とも言うべき、知的な空間を醸成・演出した。現象学への新展望、碩学によるユダヤ学の成果、表現主義を対象とした図像学的解釈学の試み、と大きな、拡がりと深みとをもつた縦横な論議を列席した参加者各個は、ここに共有することになった。神話と科学、文学テクストと解釈学、更には、京都大学准教授・杉村康彦氏を迎えて、生誕一〇〇年記念シンポジウムとしてポール・リクールに関する討議の場までもが設けられた。二日に亘っての研究集会は、まさに知の饗宴のごとき、「セッション」というそのままのささやかな名称には如何にも相応しからぬ、余りにも大きな企画となつた。むろん、その根底には、どの様なテーマであっても、模倣行為やミメーションへの「問い合わせ」が潜行し、深く意識されていた。

更に、共同研究者三名は、パリ・ディドロ大学へ飛び、当地の学者たちとの開かれたセミナーを行つた。合田は、黒田昭信氏（現ストラスブール大学准教授）をディスカッサーとして、鶴見俊輔と竹内好をめぐつて日本の哲学的可能性について刺激に満ちた考察を行い、井戸田・大石は、前年度の鷗外シンポジウムの延長上に大きく論点を転回させ、それぞれが自らの当初の研究目的を、セシル・坂井氏（パリ・ディドロ大学）、エマニュエル・ロズラン氏（イナルコ、フランス国立東洋言語文化学院）をディスカッサントとして、強度ある言葉で語ることになった。そして三者は、そこでの知的興奮を維持しながら、そのままストラスブール大学へ向かい、明治大学大学院とストラスブール大学大学院の院生交流合同発表会に参加し、その初日に、ストラスブール大学のスタッフとのシンポジウムに臨んだ。クリスチャン・セギー氏（ストラスブール大学教授）と大石がそこでの学術責任者となつた。

延々とこの間の記憶を呼び戻しつつ述べてきたが、ここに記し得なかつたことのほうがあまりに多い。三年間の歳月は、さながら、実に長い、東西両文化を根源的に貫流する大きな問いをめぐつての、時間的・空間的な、また、あらゆる学問分野を果敢に越境していく知的な旅程の如くであつた。さて、この複雑さを一層深めた、出口の見えない

今の時代、現下の世界的状況にあって、反時代的でもあれば、また尖端的でもあり得るような知的活動の共有され、生きられた時間を、私たちは、ここに、その成果報告書としてまとめあげ、ひとまずは世に問うこととなる。充溢を極めた三年間の思索の深み、知的拡大は、もとより一朝一夕に成果として形をなすにはあまりにも大きなものだった。問題は、ここに刊行する「成果報告書」での、各自の暫定的な論述、その思惟の軌跡では、決して終わることのないほどの質量を伴った、自ずと抱え込んだ諸課題を、今後のそれぞれの研究の現場において、私たちは、果たしてどこまで拡充し、展開させていくことが出来るか、にある。ここにまとめたものは、そのための、いわば、里程碑ないしは橋頭堡であるにすぎない。眞の対話的思索は、これから各個の、三年に亘る冒險的な営為によつて鍛え上げられた身体および知性を一層、するどく研ぎ澄ませることによつてこそ、意義を見出されることになる。この間の、想定以上に拡大し延び拡がつた諸課題の冒險的な打ち立てと、身を削りつつの踏破とによつて、本共同研究は、結句、今後、どの様な帰趣をみることになるか。それは、いわば、未来に属する事柄である。われわれの終わりなき探求の道筋は、わずかにその端緒を開き得たに過ぎないのでもあるだろう。いわば、眞の成果は、今後の長い研究生活のはるか先にあつてこそ、その実を結ぶかに思われる——。それを、これから来るであろう春秋に富んだ新しい世代の人々にバトンとして渡さなければならぬ、学に志す道を歩み続ける者としての重い責務がある。

いささかの心地よい知的・肉体的な疲労感を、いまだ全身に覚えながら、長くて短かつた、燃焼しきつたこの三年間を総括しつつ、三年に亘つた共同研究のささやかな「研究成果報告」のための後書きに代えることとする。末筆ながら、この間に、われわれの研究課題に深く賛同され、多くの支援を賜つた数え切れないほどの、領域を超えて真摯に集つてくださつた諸氏へ深甚の感謝の言葉を申し述べたい。人文科学の灯は移り変わりゆく時の流れとともに、已むことなくハイブリッドな様相を呈する。それは、決して絶やされることのない私たちにとつての、常に変わることなき叡知へ向けての導きなのであり、そこに係わる者としての使命と歎びとをもつて本書を私たちの生の、ひとつの証しとしたい——。それに耐えうるものとなつてゐるかどうかは、本書を偶然にも手にされるまだ見ぬ読者諸氏の判断に委ねるほかはない。

(二〇一七年一月二三日擗筆)